

学生のスポーツ意識と生涯教育

Hisakawa, Taro / 久川, 太郎

(出版者 / Publisher)

法政大学体育・スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 / 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2004-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007207>

学生のスポーツ意識と生涯教育

Sports Consciousness OF students and Life Education

久川 太郎
Taro HISAKAWA

1 前書き

スポーツと私たちの余暇活動との関係は時代とともに変化している。またスポーツを実施する人の年齢にも大きく左右される。現在、私たちがスポーツと、どのようにかかわっているか考えてみると、自分で実際にスポーツをする、競技場に出向いてスポーツを観る、テレビ、ラジオを視聴する、新聞・雑誌などを読むなどの行動でスポーツとかかわっている。私たちはこのようにスポーツを媒介としながら健康を維持・増進し、友人や周りの人々との会話を楽しみ、交流を深めている。また世界規模のスポーツに関心を寄せる人、自分の競技力向上を図る人もいろいろと目的は様々であるが、スポーツは今や私たちの生活の一部になろうとしている。

スポーツを生涯教育の面から考えると、これからは、年齢・性別あるいは身体のハンデキャップなどに関係なく誰もが生涯を通して各種のスポーツにかかわり、楽しむことができるようにならなければならない。そうなったとき、私達は自分の生涯教育の中にスポーツをひとつの柱として考えてゆくことが可能になるであろう。

現在、わが国の余暇環境を見ると労働時間が世界的に見ても短縮され、余暇時間が増大されたにもかかわらず、日本人の余暇の過ごし方にはまだ問題が多い。また余暇関連施設、交通手段、仲間など余暇をめぐる環境も十分とは言えない。しかし今後、自己啓発・社会参加・健康維持増進・社会生活の変化による心身のゆがみを解消する上でスポーツの果たす役割は大変重要になると思われる。

このように私たちの生活と密接な関係を持つスポーツだがその面白さやすばらしさを享受するには、自分がそのスポーツを実際にした経験がありさらにそのスポーツの情報が、たくさんあることが重要である。そうなったとき、自分が以前体験したスポーツあるいは観戦したスポーツが生涯スポーツのひとつの柱となり、スポーツの生活化が実現されるであろう。

今回、法政大学工学部二年生を対象に学生のスポーツに関する意識と行動を調査した。(注1) 青年のスポーツについての意識が社会人とどのように違うのか、さらに誰もがスポーツを享受するには何が必要になるのか考察したい。

2、学生のスポーツへの関心

2-1 スポーツが好きですか。

表1 スポーツが好きですか (単位人)

	男性	女性	合計
見るのもするの好き	57	18	75
見るのが好き	12	9	21
するの好き	12	5	17
見るのもするの嫌い	1	0	3
無回答	2	1	3

学生の「スポーツの好き嫌い」の回答は、表1の通りである。これによると「見るのも自分がするの好き」が、男性で77パーセント、女性は55パーセントで全体では64パーセントであった。

「観るのが好き」は男性が14パーセント、女性は27パーセントだった。「自分がするの好き」は男性が14パーセント、女性は15パーセントであった。これらを含めた「スポーツ好き」は男性が97パーセント、女性が96パーセントであった。このように大学生は男性女性を問わずスポーツ好きなことがうかがえる

2-2 好きなスポーツ・嫌いなスポーツ

大学生のスポーツの好みについての調査結果は、表2である。好きなスポーツは、男性ではサッカー、野球、バスケット、バレーボール、ボウリング、スキーが上位を占めている。

表2 好きなスポーツと嫌いなスポーツ (単位人)

	好きなスポーツ		嫌いなスポーツ	
	男性	女性	男性	女性
サッカー	46	15	4	6
野 球	45	15	4	6
バスケット	34	14	3	2
ボウリング	23	20	2	3
卓 球	21	19	4	0
バレーボール	24	15	5	2
スキー	23	15	2	1
テニス	20	17	2	2
ボクシング	23	4	2	9
バドミントン	11	21	3	1
水 泳	12	10	10	6
アイスホッケー	17	5	3	3
スケート	8	12	2	2
ラグビー	10	5	7	5
アメリカンフット	10	5	3	4
陸上競技	9	4	11	10
ハンドボール	8	5	6	5
アイスホッケー	9	4	2	2

一方、女性ではバドミントン、ボウリング、卓球、テニス等が好まれている。男女全体ではサッカー、野球、バスケット、ボウ

リング、卓球、バレーボール、スキー、テニスの順である。この結果から大学生には、単に観るだけでなく自分が実施できるものが好まれているようである。それは体験することによって、そのスポーツの楽しさや感動をより高い次元で実感できるからなのであろう。

2-3 スポーツから連想される言葉

私達は、スポーツを実施するにあたっては、時間、費用、仲間、体力、施設等の制約を受けている。では、大学生はスポーツから何をイメージするのであろうか。大学生の回答は表3の通りである。これによると、男性では、「努力」「仲間」「健康」「汗」「才能」「楽しさ」「勝敗」がイメージされ、女性では「青春」「努力」「健康」「仲間」「楽しさ」が上げられている。これから大学生は、スポーツに仲間、楽しさ、健康、努力をイメージしている。またスポーツは青年の活動の中で重要な位置をしめ、それ以降の生活の中で重要な生きる力になっていることがわかる。一方、社会人は、大学生と少し異なり、仲間、青春、努力、苦しさ、辛さ、涙を上げている人が多い。これは青年期が思い出の中に生きているからなのであろう。そしてスポーツが青年期の重要な活動だったことを示している。

表3 スポーツから連想される言葉 (単位人)

	男性	女性	合計
汗	32	14	46
健康	33	18	51
たのしさ	28	16	44
努力	40	19	59
才能	31	8	39
勝敗	28	13	41
根性	26	14	40
面白み	23	6	29
仲間	33	17	50
青春	16	20	38
苦しさ	14	10	24
辛さ	10	9	19
涙	12	6	18
面倒くさい	5	0	5
孤独	4	1	5
協調性	1	1	2
日焼け	2	6	8

3. するスポーツ

大学生はどんな目的でスポーツを実施しているのだろうか。「スポーツから連想される言葉」から、うかがわれるように彼らは、大きく分けて、「健康志向」「余暇をエンジョイする」「自己啓発」「自然志向」などの欲求をみたそうとしているのである。そのためにチャンピオンスポーツ(競技型スポーツ)を目指す人もいるし、楽しむスポーツ(レクリエーション型スポーツ)をする人もいる。学生の回答は表4の通りである。

表4 自分でするスポーツ (単位人)

	よくする			時々する			合計
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	
野球	7	0	7	11	1	12	19
サッカー	6	0	6	15	2	17	23
バスケット	4	1	5	10	8	18	23
バレーボール	2	2	4	5	5	10	14
テニス	1	2	3	4	6	10	13
バドミントン	0	1	1	3	11	14	15
卓球	3	2	5	14	10	24	29
水泳	0	3	3	6	5	11	14
ボウリング	7	3	10	15	14	29	39
スキー	5	3	8	6	3	9	17
自転車	3	7	10	1	2	3	13
スケート	1	0	1	3	6	9	10
登山	0	0	0	6	2	8	8

3-1 実施しているスポーツ

大学生の実施しているスポーツで、まず目を引くのはボウリングの実施率の高いことである。男性、女性とも1位を占めている。ボウリングは実施方法や運動量からみて健康志向型、あるいは周りの人々との触れ合いや楽しみをともなったスポーツとっていいのだろう。次に野球、バスケット、バレーボールといった、運動量も多く競技性も高いスポーツが好まれている。これらのスポーツは彼らが大学生でありスポーツをする環境に恵まれているからこそ実施が可能なのであろう。社会人になるとボウリング以外は実施している人が少なくなってしまう。ピープルの調査(注2)によると社会人になって実施している上位のスポーツの中には大学生が好んでするスポーツはすくない。ピープルの調査対象はスポーツクラブの会員であるが、男性ではゴルフ、筋力トレーニング、水泳、ウォーキング、ジョギング、ストレッチ体操が多く実施されている。一方女性では水泳、エアロビクス、テニス、ウォーキング、スキー、ゴルフ、ストレッチ体操等が実施されている。このように、スポーツクラブの会員では、大学生とは違い健康志向のスポーツ意識が高く、スポーツが生活の中に組み込まれているのがうかがえる。一方、一般の社会人を対象に行った調査(この一年間に行った運動・スポーツ調査)(注3)に拠ると第1位がウォーキング(歩け歩け運動・散歩などを含む)40.2%、第2位が体操(ラジオ体操、職場体操、縄とびなどを含む)14.5%、ボウリング13.5%、軽い球技(キャッチボール、円陣パス、卓球、ドッチボール、バドミントン、テニスなど)12.2%、軽い水泳11.1%などとなっている。人々はこの現状をどのように考えているのかというと、この現状に満足しているのはわずか11.9%で不満は58%である。今後、休暇が増える、あるいは勤務時間が短くなる、一緒に行く仲間ができる、近くに手軽に使用できる施設があるなどの条件が整えば、実施されるスポーツ活動にも変化が生じ、満足する人がふえるであろう。

次に学生ではスキー、スケート、スノーボード、水泳、といったシーズン・スポーツを上げている人も多い。これには青年期の特徴が現れている。というのは彼らにとってスポーツは自己表現のひとつであり、そのためスポーツにも、フアッシ

ョンの面が重要視されている。また格好のよさも大切なのであろう。一方、社会人では水泳が上げられている。水泳には、日常生活を離れて楽しむ余暇エンジョイスポーツの意味もあるのだろう。これらから、大学生は、恵まれた体力、時間、設備、費用などで運動量の多い競技性の高いスポーツも実施しているが、社会人になると体力やスポーツ環境が不十分のこともあって余暇エンジョイ形の軽いスポーツ種目に移行していくのである。また近年スポーツのなかには、地域密着型で応援すること自体がスポーツになっているものもある。

3-2 実施しているスポーツの費用

スポーツを実施する際には「用具、ウェア等の費用」「入場料」「施設使用料」「会費、受講料」「交通費」などの諸費用が必要になる。学生のアンケートによると、平均で一人、年間4万9千2百円かけており、社会人より多い。前にも述べたように、彼らがスポーツにファッションも求めている分だけ高額になるのであろう。アンケートの回答から伺えることはサッカー、スキー、スノーボード等は彼らには、おしゃれも楽しむスポーツなのでもある。「入場料、施設利用料」についてはスキーなどのアウトドアスポーツが高額である。比較的安く利用できるものとしては卓球、ボウリングがあげられていて愛好者の多い理由の一つなのであろう。また学生と社会人を比較すると、「用具、ウェア等の費用」を除いて学生のほうが少額なのは学生割引や学内の施設を利用することができる環境にあるからなのであろう。

表5 スポーツにかかる費用

種目	人数	用具の費用(千円)	入場料施設料(千円)
ボウリング	39	2.7	5.9
卓球	29	1.0	0.9
サッカー	23	9.1	0
バスケット	23	8.2	0
スキー	17	46.4	39.1
テニス	13	8.5	18.6
野球	19	51.8	8.7
スノーボード	12	56.4	44.3

4、観るスポーツ

スポーツをテレビで楽しむ人は多い。社会人では男性が95.2%、女性が86.9%と高い数字が出ている。ピープルの調査によると、男性では野球、サッカー、ゴルフ、マラソン、テニス、モータースポーツ、相撲、ボクシング、の人气が高い。女性では野球、バレーボール、サッカー、テニス、マラソン、スケート、相撲、ゴルフ水泳に人気がある。テレビでのスポーツ観戦は、競技場に出かける必要もなく、一番見やすい場所で、しかも解説までついているなどで、現代人のスポーツライフの中心になっている。このテレビのスポーツ番組は実況中継、スポーツニュース、スポーツ教室、スポーツバラエティに分けられる。中でも実況中継はテレビの最も人気のあるところで、シーズン中のプロスポーツやオリンピック、ワールドカップ、高校野球などのイベントがあるときには非常に多くの人々に視聴されている。また「スポーツニュース」

はハイライト的な要素があり、多くの人々が楽しみ、またスポーツに関する情報源となっている。さらにプロスポーツにはサッカーや野球のように、地域密着型で応援を楽しむスポーツになっているものもある。

表6 テレビで観るスポーツ (単位人)

	男性	女性	合計
サッカー	66	26	92
野球	59	21	80
駅伝	31	15	46
ボクシング	37	7	44
バレーボール	22	17	39
バスケット	27	10	37
テニス	23	10	33
マラソン	27	6	33
ジャンプ	18	5	23
水泳	14	8	22

4-1 大学生がテレビで観るスポーツ

「テレビでスポーツを見るか」に対する回答は、大学生では男女とも80%の学生がテレビでスポーツを観戦していると答えている。では大学生はどんなスポーツを観戦しているのだろうか。男女とも1位がサッカー、2位がプロ野球で、男性の3位はボクシングだが女性ではバレーボールである。男女総合でみると男女とも1位がJリーグサッカー、第2位が野球である。次いで駅伝、ボクシング、バレーボール、テニス、マラソン、ジャンプ競技、水泳の順である。これを社会人と比較すると社会人の1位が高校野球を含めた野球であるのに対して学生はJリーグサッカーであることが特徴的である。社会人では「中継番組で視聴したい番組」はプロ野球、プロゴルフは50歳台に多く大相撲は60歳台以上に多い。Jリーグサッカーは30歳台に多い。このように年代により視聴したいスポーツに差が見られる。

さて大学生の「テレビで見るスポーツ」は、二つに分けられる。その1は自分が少しでも経験し、その競技に興味を持ち、技術的な面にも興味を持っているスポーツである。サッカー、野球、バレーボール、バスケット、テニスなどがこれにあたる。これらに対して、実際には自分では経験できるものではないが、そのスポーツの迫りに圧倒され疑似体験して楽しんでいるスポーツがある。ボクシング、ジャンプ競技などがこれである。

さらに社会人や学生の視聴したいスポーツを見ると、次のようなことがうかがえる。それは、観たいスポーツには大スターの存在があることである。野球、サッカー、バレーボール、テニスなどでの大スター、人気者の活躍やマスコミの対応が人々に興味を抱かせ、そのスポーツの好感度を上げているのであろう。

4-2 テレビのスポーツ番組の放送時間と視聴率

表7 スポーツ番組の放送時間 (2003年1月2日から8月2日まで)
(単位 時間:分)

	NK	NK教育	日本	TBS	フジ	テレビ朝日	テレビ東京
43日間合計	100:09	39:41	65:32	43:30	26:01	36:23	19:45
1日平均	2:32	0:58	1:31	1:01	0:32	0:51	0:28

テレビのスポーツ中継は人気番組のひとつであるが2003年1月2日から8月2日間でスポーツ番組の放送は表7のようであった。毎日1時間ほどのスポーツ番組が放送されている。さらに視聴率(ビデオリサーチによる関東地区のテレビランキング)を見ると次のようであった。調査をしたこの30週の中でプロ野球は22回、大相撲3回、サッカー3回、大学駅伝2回、ジャンプ競技2回、世界水泳1回、K-1が1回の合計34回がベスト20に入った。スポーツがベスト20に入らなかった週は11週あり、これは調査をした30週の33%にあたる。ベスト20にはいったスポーツの内訳を見ると野球はすべてプロ野球であり対巨人戦である。ついで大相撲は人気力士の引退やけがによる力士の休場が多いことによる不満があり3回であった。サッカーはワールドカップ等による視聴者の目がこえたのであろうか、外国チームとの対戦による3回であった。

4-3 スポーツを観るときの魅力

大学生がスポーツを見るときの魅力はなんだろうか。男性の回答は技術力、得点シーン、勝敗、身体能力、スピード、戦略、戦術、の順であった。女性では真剣さ、スピード、技術力、スリル、勝敗、得点シーン、の順であった。男性と女性では多少の差はあるが選手の持つ技術力やスピード、得点シーンに魅力を感じているといえる。こうして彼らはスポーツに日常生活では味わえないものを疑似体験して喜びを味わっている。

表8 スポーツを観るときの魅力 (単位:人)

	男性	女性	合計
技術力	48	18	66
スリル	25	18	43
戦術、戦略	28	10	38
勝敗	34	16	50
真剣さ	14	19	33
ひたむきさ	9	10	19
スピード	28	19	47
得点シーン	40	15	55
さわやかさ	5	11	16
華やかさ	13	6	19
力つよさ	18	13	31
豪快さ	26	11	37
身体能力	30	14	44
終了シーン	5	5	10
人柄	7	3	10
その他	6	0	6

4-4 競技場で観戦するスポーツ

スポーツを競技場で観戦するのはテレビで見るとは感動の程度が違うようである。たしかに四角に仕切られた画面の前で少人数のグループと感動を共有するよりも、大観衆の中の一人としてゲームを味わうのは最高の感動であろう。不況であってもプロスポーツの人気は高く、プロ野球の観客動員数は増加しておりJリーグは若い年代を中心に多くの観衆を集めている。スポーツのプロ化はラグビー、バスケット、バレーボール、アイスホッケー、卓球でも実施されており、スー

パスターの登場やその活躍、スポーツ享受能力の高まり、さらには余暇環境の改善により競技場での観戦者は増加するに違いない。

少し意味合いが違うが小学生や中学生の子供や孫を持つ人には運動会や体育祭を見る機会があり楽しみのひとつである。

4-5 学生の「競技場で見るスポーツ」

学生が競技場で見るスポーツは第9表の通りである。これらは、野球、サッカー、競馬、テニス、等のプロスポーツとバスケット、バレーボール、水泳、ラグビー等の大学アマチュアスポーツの二つに大別される。ひいきチームの観戦に行つてその感動に浸るプロスポーツの醍醐味、自分の所属する大学の応援に行つて味わうその感動はどちらも素晴らしいものであろう。そして大学スポーツの応援は自分の所属する大学のチームの強さに左右されているようである。

表9 学生の競技場で見るスポーツ (単位:人)

	よく		行く	
	男性	女性	男性	女性
野 球	8	1	16	10
サッカー	3	0	10	3
ボクシング	1	0	1	0
ゴルフ	1	0	0	0
バスケット	0	0	3	1
バレーボール	0	1	3	0
ラグビー	0	0	2	0
アメリカンフットボール	0	0	1	1
水 泳	0	0	2	2
剣 道	0	0	0	2
弓 道	0	0	0	1
ボウリング	2	0	3	1
アイスホッケー	2	0	0	2
スキー	0	0	3	0
陸上競技	0	0	3	0
マラソン駅伝	1	1	5	1
競馬オートレース	2	1	4	2
テニス	1	1	1	4

5 読むスポーツ

スポーツの楽しみ方に新聞や雑誌、写真集を読むこともある。この楽しみ方は自分の好きなときに好きなところで読んで楽しめる利点がある。現在、スポーツ紙は朝刊が10紙、夕刊が5紙の計15紙が刊行されている。発行部数は朝刊836万部、夕刊309万部の計1145万部である。また一般紙でもスポーツ面の取り扱い方は大きくなっており種目によっては一般紙のほうの取り扱い方が大きいこともよくある。

雑誌は月刊誌が114誌、週刊誌が7誌で根強い人気を持っている。スポーツのビデオカセットの売上はカセット全体の売上の2%以下、スポーツのビデオデスクの売上は全体の0.2%前後である。今後スポーツのカセットやデスクの売上は伸びるだろうが現在、読むスポーツとしては一般紙を含めた新聞と雑誌がよく利用されている。

6 スポーツ情報をどこから得るか

読売新聞の世論調査(注4)によると「スポーツに関する情報をどこから得るか」の回答は「テレビ番組」が68%で最多である。ついで「一般新聞の記事」が55%で、「スポーツ新聞」が15%「ラジオ番組」8%「パソコンのインターネット情報」7%であった。

大学生の回答では「テレビ」80%、「新聞」47%、友達30%、雑誌47%、インターネット22%であった。一般の人と比較すると雑誌や友達からが多くスポーツが回りの人との話題となっていることがわかる。

表10 大学生はスポーツ情報をどこから得るか

	人数(人)	%
テレビ・ビデオ	80	68
新聞	55	47
友達・仲間	35	30
雑誌	31	26
インターネット	26	22
ラジオ	11	9

7. スポーツをする目的と目的に合ったスポーツ

7-1 スポーツをする目的と効果

社会人がスポーツをする目的や効果をどう考えているのだろうか。レクリエーション余暇関連資料(注5)によると「健康の維持増進」「ストレスの解消」「ダイエットなどの美容上の効果」「知人、友人との交流」などが上位を占めている。これらは、スポーツに身体的バランスを保つ手段と、精神的安らぎを得るという二つの目的を見出していると考えられる。確かに、現代人、特に都市にすむ人々にとってスポーツは生活をする上で生じる様々な問題を解消する効果があるのだろう。大学生の回答では、「健康の維持」「体力の維持増進」「気分転換」「ストレスの解消」「美容、肥満対策」と並んで「自分の限界への挑戦」「家族、友人との触れ合い」「上達、相手との競い合い」「ゲームを楽しむ」「日常から離れる」「自然との触れ合い」を挙げる人が多い。また、「おしゃれを楽しむ」を挙げる人もあり若い人の中では、スポーツをひとつのファッションと考えていることがわかる。

7-2 目的に合ったスポーツ種目

大学生はどのような目的でどんなスポーツ種目を実施しているのだろうか。以下がその回答である。

健康の維持増進・体力の維持増進	マラソン、ジョギング、ランニング、水泳
気分転換・ストレス解消	サッカー、ボウリング、ホウリング
体を動かす楽しさ	バスケット、サッカー、野球
美容・肥満の解消	エアロビクス、水泳、ウォーキング
家族・友人との触れ合い	ボウリング、卓球、野球、パドミントン、テニス
学校地域との触れ合い	野球、バレーボール、サッカー
自分の限界への挑戦	マラソン、駅伝、重量挙げ、トライアスロン
上達・相手との競い合い	卓球、テニス、サッカー、駅伝
ゲームを楽しむ	サッカー、バスケット、バレーボール、野球

自然との触れ合い
日常から離れる
生活の充実
生きがいを感じる
生涯の楽しみのひとつ
おしゃれを楽しむ

登山、ハイキング、キャンプ、つり、サイクリング
登山、ハイキング、スキー、スノーボード、キャンプ
ゴルフ、登山、ハイキング、バスケット、卓球
野球、スキー、スノーボード、サッカー、バスケット
野球、ゴルフ、ボウリング、卓球
スキー、スノーボード、テニス、ダンス、スケート

大学生が好んで実施するスポーツはこれらの条件を兼ね備えたものなのである。サッカー、野球、バスケットボール、バレーボール、ボウリング、卓球、テニス等が彼らの目的に合ったスポーツとして好まれているわけである。

8 スポーツの生活化

日本人の平均寿命を国際的に見ると女性が84.93歳男性は78.07歳といずれも世界一である。(注6)さらに平均余命で見ると、40歳まで生存するひとの割合がすでに高原状態であるのに対して65歳まで生存する人の割合、および80歳まで生存する人の割合はまだ増加傾向にある。高齢社会では生涯教育が大切な要素になるが生涯教育をする理由はいろいろある。趣味を豊かにする、周りの人との親睦を深める、新たな友人を得る、健康・体力づくり、老後の人生を有意義に過ごす、教養を高める、自由時間を有効に利用する、家庭・日常生活、地域をよりよくする、社会の進歩に遅れない、世の中の事を知るなどが挙げられる。この目的の中で、スポーツの果たす役割は大きい。しかし、スポーツを日常生活に組み入れることは現在の余暇環境ではいろいろ問題がある。「体力・スポーツに関する世論調査」(注7)によると「運動・スポーツを行わなかった理由」としてあげられたものには以下のものがある。仕事(家事・育児)が忙しくて時間がない41%、年をとったから17.1%、体が弱いから15.8%、スポーツは好きではないから11.0%、仲間がいないから4.9%、お金がかかるから2.8%、場所や施設がないから2.4%、指導者がいないから0.7%、機会がなかったから8.6%、特に理由はない12.2%である。これらから、ひま(自由時間)、体の状態、お金、施設、仲間、企画等の不備がスポーツの実施を妨げていると思われる。今後生活にスポーツを組み入れるには、スポーツを身近に感じ、さらに(1)自由な時間が確保される。(2)余暇の出費に、スポーツを実施するための費用があらかじめ組み込まれている。(3)身近かな場所に、スポーツを実施できる施設がある。(4)いっしょにする仲間がいる。などの条件が満たされることが必要である。

そのための施策として次のことが考えられる。まず、「スポーツは自分のものだ」という意識をもつことだ。サッカーのワールドカップの開催は私たちに、スポーツを身近なものに感じさせ、そのすばらしさを実感させてくれた。さらに見る喜びだけでなく、参加する喜びをくれた。そして私たちに、スポーツへの参加の意欲を掻き立ててくれた。各地で、年齢を問わずスポーツに参加する人が出てきた。観る側からする側へと意識が変化してきている。第二はスポーツを学校や企業の提供するものから私たちが主体的に実施するものへ変え

る努力が必要である。商業的な施設や講座はスポーツへの取
つ掛かりとしては重要であるが、社会人になって実施するに
は私たちが、主体的に選択し実施できることが必要である。
第三は生涯教育にスポーツを組み入れるには若いときの経験
が大切である。大学生は、スポーツをする環境には恵まれて
いる。より多くの種目を経験しておくことが望まれる。第四
はスポーツを実施できる場所を充実すべきである。社会人の
スポーツ施設の現状はあまりにも貧弱である。大学生のスポ
ーツ経験が社会に出てからも生き、スポーツの生活化を可能
にするために施設の充実が急がねばならない。

表11 運動を実施している場所

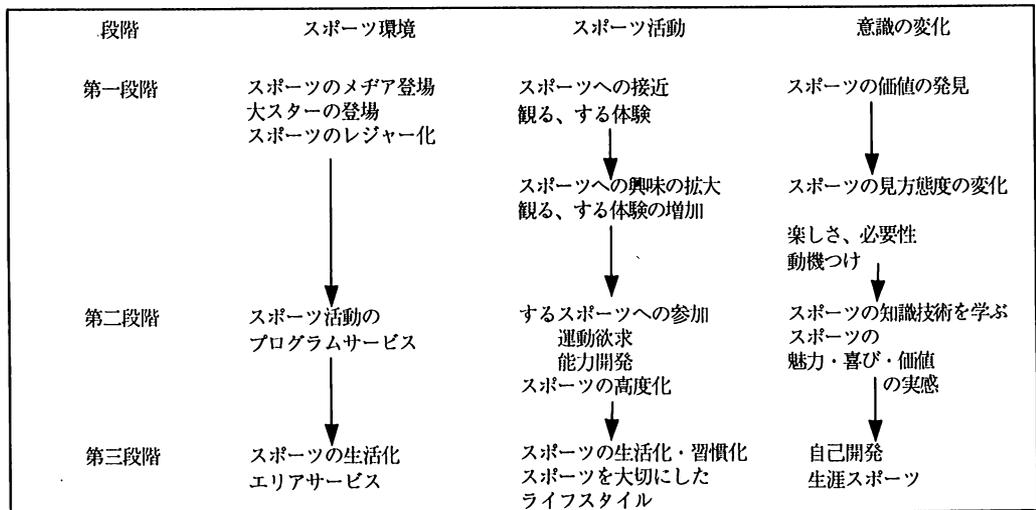
	社会人 (%)	大学生 (%)
道路や遊歩道	34.4	10.8
県や市町村の施設	28.1	25.3
民間のスポーツ施設	22.9	28.1
近所の広場や公園	21.6	20.5
自宅	19.2	10.2
山、川、海	17.1	14.7
学校の施設	18.0	31.9
職場の施設	2.9	1.8

今後、整備してほしいスポーツ施設として近所の広場や公
園、球技のできる多目的広場、プール、ハイキングコース、
トレーニング場、体育館、サイクリングコース、テニスコ
ート、野球場、陸上競技場、武道場を挙げる人が多い。

9、あとがきに代えて（スポーツを楽しむために）

現在、余暇活動の市場の中でスポーツの占める割合はまだ
非常に小さいが今後、スポーツの占める割合は増えるであ
ろう。今回の調査で、大学生は男性・女性を問わずスポーツ
好きが多いことがうかがえた。また社会人でも多様なスポ
ーツ種目への参加意欲は強い。「レジャー白書」（注8）に
よると現在競技人口が一千万人以上のスポーツは十六種目
ある。これから考えると、量的にはすでにスポーツ時代は
到来しているといえるだろう。しかし、月に二回以上行
っているスポーツは七種目であり、週に一回以上おこな
っているのは、器具を使わない体操だけである。これ
ではスポーツが生活化・習慣化のレベルに達したとは
言えない。今後スポーツの生活化・習慣化を進め
スポーツを生涯教育のひとつの柱にするには
スポーツの享受能力の開発が急がねばならない。その
ためのスポーツの生活化、習慣化のプログラムを考
えてみたのが以下のプランである。

スポーツ享受能力の開発



今後、余暇をめぐる環境が整い、個人のスポーツ享受能力が開発された時スポーツの生活化が実現されるのであろう。スポーツ好きの学生達が生涯教育の中にスポーツを1つの柱とする日が実現する事を願っている。

- 注(1) 調査方法 対象者 法政大学「工学部2年生」
実施方法 アンケート用紙
有効回収数 117人（回収率78.6）
回答者内訳 男性84人女性33人
- 注(2) ピーブル「現代人のスポーツ環境」調査
- 注(3) 「体力・スポーツに関する世論調査」内閣総理大臣官房広報室 2000年10月
- 注(4) 「見るスポーツ」読売新聞2003年3月6日
- 注(5) 日本子ども資料年間KTC中央出版2002
レクリエーション余暇関連資料2001 No.505
- 注(6) 「簡易生命表」「完全生命表」厚生労働省大臣官房人口動態保健統計課
- 注(7) 「オリンピックに関する意識調査」日本オリンピック委員会2001年3月調査
15-65歳の男女565人
- 注(8) 「レジャー白書」余暇開発センター